

# 旭日、遙かなり2

横山信義

*Nobuyoshi Yokoyama*

## 立ち読み専用

立ち読み版は製品版の1～20頁までを収録したものです。

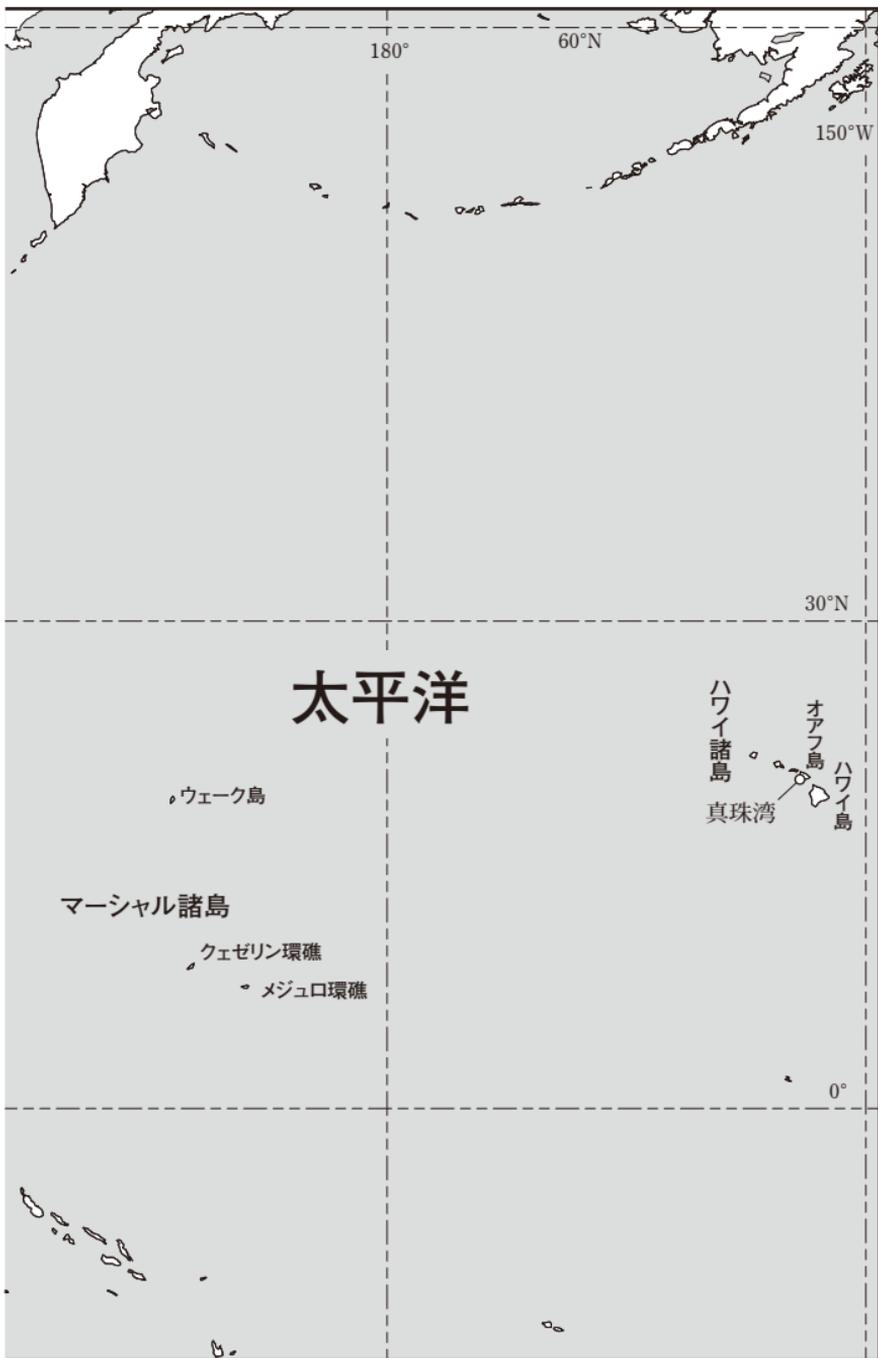
### ページ操作について

- 頁をめくるには、画面上の▶(次ページ)をクリックするか、キーボード上の▶キーを押して下さい。
- もし、誤操作などで表示画面が頁途中で止まって見にくいときは、上記の操作をすることで正常な表示に戻ることができます。
- 画面は開いたときに最適となるように設定してありますが、設定を変える場合にはズームイン・ズームアウトを使用するか、左下の拡大率で調整してみてください。
- 本書籍の画面解像度には1024×768pixel(XGA)以上を推奨します。

扉 画 高荷義之  
地 図 ・ 図 版 安達裕章  
編 集 協 力 らいとすたつふ

目次

第一章	ウエーク沖海戦	9
第二章	未熟 <small>みじゆく</small> なる巨艦	63
第三章	極北 <small>きよくぼく</small> の星条旗 <small>せいじょうき</small>	83
第四章	作戦名「野火」 <small>「プレリリーニアファイア」</small>	119
第五章	マーシャル沖の対決	167
第六章	キンメルの決意	233



# 太平洋

ウェーク島

マーシャル諸島

ケゼリン環礁

メジュロ環礁

ハワイ諸島

オアフ島

ハワイ島

真珠湾

30°N

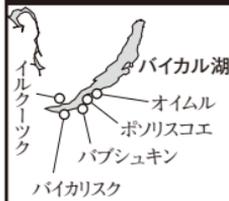
0°

180°

60°N

150°W

# 西部太平洋要図







旭日、遥かなり 2



第一章  
ウエー  
ー  
夕  
沖海戦

## 1

空母「飛龍」の戦闘機隊長岡嶋清熊大尉が後ろを振り返ったとき、二条の白煙が見えた。

九七式艦上攻撃機二機が被弾し、火を噴いたのだ。二機とも編隊から落伍し、煙を引きずりながら高度を下げ、視界の外に消えていった。

「しまった！」

岡嶋は唇を噛み締めながら、操縦桿を右に倒した。零式艦上戦闘機が大きく傾き、急旋回に入った。艦攻隊の近くに、敵機がいるはずだ。ほやほやしていれば、三機目の犠牲が出る。

(言わんこつちやない！)

岡嶋の怒りは、「飛龍」の飛行長川口益少佐や、空母「蒼龍」の第二航空戦隊司令部に向けられて

いる。第二航空戦隊は昨日、昭和一六年二月二日よ

り、ウエーク島への攻撃に加わった。

初日の攻撃では、「蒼龍」「飛龍」より零戦一八機、九七艦攻二七機が出撃し、同島の飛行場を叩いた。

このときは、敵機が姿を見せることはなく、攻撃隊は悠々と投弾を終えて引き上げた。

二航戦司令部は、「ウエーク島には、敵戦闘機はいない」と判断したのだろう、二三日の攻撃における直衛戦闘機を「蒼龍」「飛龍」より三機ずつにする

と決定した。

岡嶋は、この決定に異議を唱えた。「零戦六機では、艦攻隊を充分援護できません。敵戦闘機がいなしとの確証がない以上、零戦は本艦と『蒼龍』から九機ずつ出すべきです」

と、川口飛行長に食い下がった。

その具申は容れられず、ウエーク島に対する第二次攻撃は、零戦六機、九七艦攻三三機で実施された。現実には、岡嶋が危惧した通りになった。

六機の零戦は、艦攻隊の前方に展開し、敵機の出

現に備えていたが、敵戦闘機は零戦隊の裏を搔き、後方から艦攻隊を襲ったのだ。

これ以上、一機も墜とさせるわけにはいかない。

岡嶋は後方を振り返り、列機の動きを確認した。

村中一夫一等飛行兵曹の二番機と田原功三等飛行兵曹の三番機が追隨して来る。

「いた！」

前に向き直ったところで、岡嶋は敵機の姿を見出した。

艦攻隊の左後ろ下方に二機が見える。たつた今、艦攻を墜とした敵機だ。更なる戦果を狙っているに違いない。

「そうは行くか！」

岡嶋は敵二機のうち、手近な方に突進した。

シルバー・メタリックの地肌を剥き出しにした機体が膨れ上がり、形状がはっきりする。

主翼は中翼配置。胴体は、酒樽のように太い。

見るからに大きく、ごつい。荒くれ男を、そのま

ま航空機に置き換えたようだ。

グラマンF4F、ワイルドキャット。米海軍の主力艦上戦闘機であろう。

F4Fが、機体を翻した。一瞬、下腹が陽光を反射し、銀色に輝いた。

岡嶋は、F4Fに追いつがった。

取り逃がせば禍根を残す。どんなことをしても墜する。

F4Fが、左に大きく傾いた。急角度での水平旋回を開始した。

岡嶋も操縦桿を左に倒し、急旋回に入る。

ちぎれ雲が右に流れ、肉体が倍以上に重くなる。尻は座席にめり込まんばかりだ。僅かでも力を抜けば、操縦桿を放しかねない。

照準器の環の中で、敵機が拡大する。主翼に描かれている星のマークまでもが、はっきり見える。

速力、旋回性能とも零戦が上だ。相手の内懐に潜り込む要領で、距離がぐんぐん詰まる。

F 4 Fが、左主翼を跳ね上げた。機体を右に大きく傾け、右旋回に転じた。

岡嶋も即座に、右旋回に切り替える。

束の間、肉体が遠心力から解放されるが、すぐに新たなGがかかり、身体の重さが倍加する。

一旦開いたF 4 Fとの距離が、再び縮まる。銀色に照り輝く機体が、目の前に迫る。

結びつけたロープをたぐり寄せるかのようだ。照準器の白い環が、F 4 Fの胴体中央からコクピットを捉える。

岡嶋が発射把柄に力を込めようとしたとき、F 4 Fが再び左に旋回した。銀色の機体が照準器の左に流れ、視界の外に消えた。

岡嶋は、F 4 Fに食い下がる。

操縦桿を大きく左に倒し、左フットバーを添えて、機体を垂直に近い急角度まで傾ける。

照準器が、F 4 Fを捉えた。白い環の中央が、敵機のコクピットに重なった。

岡嶋は、発射把柄に力を込めた。

目の前に発射炎が躍り、二条の細い火箭が噴き延びた。七・七ミリ弾の赤い曳痕が、風防から胴体にかけて、ヤモリの舌のように舐めた。

F 4 Fがよろめいた。

火を噴き出す様子はなかったが、機首を引き起こすことなく、真つ逆さまに墜ちてゆく。

七・七ミリ弾は風防ガラスを貫いて、搭乗員を襲ったようだ。

岡嶋はF 4 Fを一瞥し、右に反転した。九七艦攻の編隊が、視界に入ってきた。

村中機と田原機が、岡嶋機に接近して来る。二人の部下は、協同して敵一機を墜としたようだ。

岡嶋は、直援機の定位置へと戻りながら、艦攻隊の周囲を見渡した。

敵戦闘機らしき機影は見当たらない。

ウェークのF 4 Fは、先に岡嶋の小隊が墜とした機体で最後だったのかもしれない。

(まだだ)

岡嶋は、そう思い直した。

爆撃を終え、ウェーク島の上空から離脱するまでは、安心はできなかつた。

艦攻隊が投弾を開始し、地上に爆炎が湧き起ころ始めたが、岡嶋はなおも艦攻隊の周囲を見据え、敵機の出現に備えていた。

## 2

一月二日夜半、ウェーク島は荒れ模様だった。

島の周囲には、風速一五メートル以上の強風が吹き荒れ、海面には高波たかなみが立っている。

陸地は、一〇分から一五分置きに激しいスコールによって洗われ、陣地で守備に就く海兵隊員や洋上を見張る兵の視界を妨げた。

日付が一月二三日に変わる頃、ウェーク島を構成する三つの島の一つ——西部のウイルクス島で、

守備に当たっていたビル・オライリー一等兵が、激しい波音に混じる機械的な音に気がついた。

「もしや……?」

オライリーは両目を真円に近いほど見開き、海面を見つめた。

視界は、非常に悪い。海岸の岩場に波が打ち寄せ、白く砕かれる飛沫しぶきが散る様子が、辛うじて認められるだけだ。

「どうした?」

「爆音ばくおんらしき音が聞こえます!」

部下の様子に気づいたのだろう、訝いぶかしげな声をかけたトーマス・ベッカー軍曹に、オライリーは風雨に負けまいと、大声で報告した。

ベッカーが耳をそばだてた。

オライリーも上官じょうに倣い、神経を耳に集中する。

風は相変わらず吹き荒れ、海岸からは激しい波飛沫の音が伝わって来るが、その音に混じって、エンジンの響ひびきらしい音が聞こえて来る。

「間違いなさそうだな」

ベッカーは頷き、隊内電話を取り上げた。

『キャロット』より『キッチン』。爆音らしき音を確認。目視確認は不可なれど、敵上陸部隊の可能性あり」

飛行場付近の防御陣地に、早口で報告した。

オライリーは他の守備隊員と共に、海岸付近の監視を続ける。

敵の姿は、依然肉眼では捉えられないが、爆音はそれまでよりもはつきり聞こえている。

「指揮所より命令。射撃準備だ！」

ベッカーが叫んだ。

「射撃準備！ 目標、海岸付近！」

鋭い声で命令が飛び、ブローニング一二・七ミリ機銃の銃口が海岸に向けられる。

グラマンF4F、ワイルドキャット、ヤカーチスP40、ウォーホーク等、合衆国の戦闘機の標準装備となつている機銃と同じものだ。

近距離から銃撃すれば、重爆撃機の分厚い装甲板であつても大穴を穿つ力を持つ。

波飛沫の向こう側に浮かび上がる影を、オライリーははつきり見た。

ウィルクス島に接近して来る、二隻の舟艇を。

「敵です！ ジャップが上陸して来ます！」

オライリーは、あらん限りの大声で叫んだ。

分隊指揮官のサイモン・ハリル伍長が真っ先に動いた。三名の部下と共に防御陣地から飛び出し、闇の中を突つ走つた。

「撃て！」

号令一下、重々しい連射音が響いた。

一二・七ミリ機銃がハリルらを援護し、日本軍の舟艇に火箭を浴びせる。

一隻が今しも接岸しようとしたとき、波打ち際で続けざまに爆発が起こり、湧き起こる炎が舟艇の姿を照らし出した。

ハリルと三名の部下が、手榴弾を投げたのだ。

(外れか！)

オライリーが舌打ちしたとき、今度は舟艇の上に  
火焰が躍った。

一拍置いて炸裂音が伝わり、黒煙が立ち上る。

手榴弾のうち、一発が舟艇の中に飛び込み、爆発  
したのだ。

期せずして、陣地内に歓声が上がリ、守備隊の兵  
士たちが拳を突き上げて快哉を叫んだ。

その声を標的としたかのように、舟艇の近くに銃  
火が閃いた。

日本兵が海岸に飛び降り、応射を開始したのだ。

去る一二月一日の戦闘では、日本軍の駆逐艦二  
隻を撃沈して追いついたウェーク島の守備隊だった  
が、初めて敵兵に上陸を許したのだ。

「撃て！ 奴らを叩き出せ！」

防御陣地に怒号が飛び、複数の火箭が闇を裂く。

舟艇の接岸地点に接近した兵が手榴弾を投げ付け  
れば、日本兵も小銃を撃ち、手榴弾を投げ返す。

波打ち際や海岸の岩場で、次々と爆発光が閃き、  
弾片が飛び散る。

発射炎が閃いた場所目がけて、一二・七ミリ弾が  
叩き込まれ、小銃弾が唸りを上げて飛び交う。

上陸した日本兵の数は分からない。

防御陣地にこもる兵士たちは、目の前の敵に反撃  
するだけで精一杯だ。闇の中、人影が浮かび上がる  
や、手榴弾を投げつけ、機銃、小銃を撃ちまくる。

二隻見えた舟艇のうち、もう一隻がウイルクス島  
に接岸した様子はない。

ウイルクス島は手強いと見て、新たな上陸地点を  
探しているのかもしれない。

海岸陣地の後ろ上方から、海面に向かって白い光  
芒が伸びた。

六〇インチ探照灯が、守備隊に射撃目標を示す  
べく、照射を開始したのだ。

「……！」

光芒の中に浮かび上がる影を見て、オライリーの

喉から悲鳴じみた声が漏れた。

最初に強行接岸した舟艇より、遙かに巨大な影が浮かび上がったのだ。

吹き荒ぶ強風や、高波を乗り越え、まっしぐらに海岸へと向かつて来る。

「哨戒艇だ！」

強風や銃声、炸裂音にかき消されそうになりながらも、オライリーはあらん限りの大声で叫んだ。

残存する砲台が、砲撃を開始する。

発射炎が闇を吹き払い、腹に應えるような砲声が防御陣地に届く。

光芒の中に、弾着の飛沫が躍る。

守備隊将兵は、直撃弾を期待して見守るが、哨戒艇の上に爆炎が躍ることはない。陸上からの砲撃をものともせず、突き進んで来る。

海岸にのし上げるつもりなのだ。

「撃ちまくれ！ 近寄らせるな！」

命令と共に、一二・七ミリ機銃の火箭が、哨戒艇

目がけて噴き延びる。

艇首や舷側に火花が散るが、阻止するには至らない。巨大な艇体は、機銃弾を蹴散らすようにして、突っ込んで来る。

やがて地響きと共に、哨戒艇が海岸にのし上げた。砲陣地から轟然たる砲声上がり、哨戒艇の艦橋に閃光が走る。

鈍い爆発音と共に火焰が躍り、艇と周囲の海岸を赤々と照らし出す。

このときには、既に日本兵が続々と海岸に降り立ち、内陸に侵入を始めていた。

ウイルクス島の南に位置するウエーク本島でも、海岸にのし上げた哨戒艇から日本兵が上陸を開始し、防御陣地と銃火を交わしている。

各陣地は、突入して来る日本兵目がけて銃火を浴びせ、手榴弾を投げ付けたが、敵兵を押しとどめることはできない。

日本軍は、徐々に、だが確実に橋頭堡を広げて

おり、彼らを海に追い落とすことは不可能になりつつあった。

午前五時、ウエーク島守備隊の司令部から、一通の報告電がハワイの太平洋艦隊司令部に飛んだ。

「敵ハ『ウエーク』ニ上陸セリ。戦勢、我ニ利アラズ。来援請フ」

### 3

ウエーク島から発せられた緊急信は、アメリカ合衆国海軍第一四任務部隊の各艦でも受信された。

旗艦を務める空母「サラトガ」の艦橋では、司令官フランク・J・フレッチャー少将が、難しい表情で報告電を受け取った。

「もう少し、詳しい敵情を知りたいところだな。日本軍は、どの程度の戦力をウエーク周辺に展開させているのか。戦艦、空母といった主力艦艇はいるのか。守備隊の報告電だけでは、分からないことが多い

すぎる」

そう言ったフレッチャーに、航空参謀ジエームズ・ハンター少佐が答えた。

「空母が来ていることは間違いありません。二一日にウエークを襲った敵の艦上機は、四〇機から五〇機。昨日、二二日に再度ウエークを攻撃した敵機は、艦戦と艦攻を合わせて四〇機前後です。機数から判断して、『赤城』『加賀』クラスの大型空母一隻か、『蒼龍』『飛龍』クラスの中型空母二隻がウエークの近海にいるのは確実でしょう」

「我が方が優勢とは言えぬな」

フレッチャーは、しばし思案を巡らせた。

「サラトガ」は、世界最大の航空母艦として知られるレキシントン級の二番艦に当たる。

全長二七〇・八メートル、最大幅三九・七メートルのサイズと、基準排水量三万六〇〇〇トンは、現用の合衆国軍艦中最大だ。

その巨大な艦容は、「浮かぶ航空基地」の名に

相応しい。

搭載機数は、艦上機の編成によつて異なるが、グラマンF4F、ワイルドキャット、ダグラスSB2C、ドントレス、ダグラスTB2D、デバスターを合わせて、九〇機程度を運用できる。

ただし、それは戦時編制の場合だ。

太平洋艦隊は、戦時体制に移行してから間もないため、「サラトガ」は平時編制のままでの出撃を余儀なくされた。

現時点における搭載機は、F4Fが一七機、ドントレスが三七機、デバスターが一八機。合計七二機だ。

敵が大型空母一隻ならほぼ互角だが、中型空母二隻となると、艦上機の総数でやや劣る。

「空母以外の艦艇は？」

「上陸部隊の護衛として、巡洋艦四隻ないし五隻、駆逐艦六隻ないし七隻が確認されています。他に空母の直衛艦として、巡洋艦、駆逐艦が何隻か付いて

いると考えられます」

質問を重ねたフレッチャーに、参謀長ヘンドリック・ウォーカー大佐が答えた。

（水上砲戦でも、こちらが不利か）

フレッチャーは、しばし思案を巡らせた。

「サラトガ」の護衛は、重巡三隻、駆逐艦九隻。

駆逐艦の数ではやや優るが、巡洋艦は劣勢だ。

状況によつては、敵空母の護衛艦艇も砲戦に加わる可能性がある。

そうなれば、TF14には勝算がない。

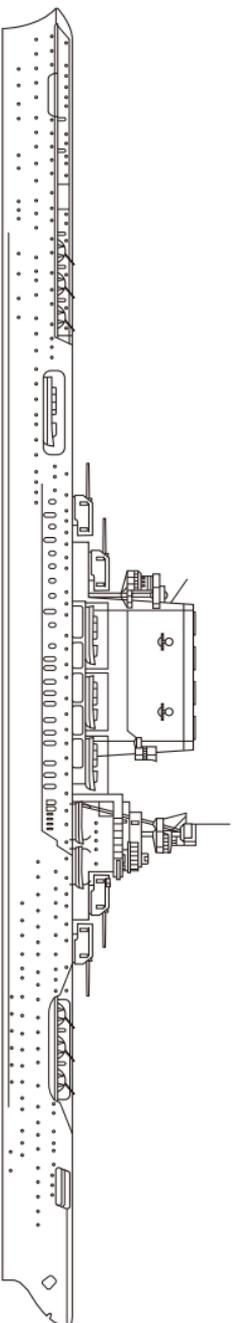
「敵の艦上機は、二度に亘るウエーク攻撃で消耗していると推測されます。それを勘案すれば、空母同士の戦闘ではほぼ互角、もしくは我が方が有利と考えられます」

ハンターが、意気込んだ様子で具申した。

空母同士の戦いは、過去の海戦史に例がない。

合衆国海軍の名譽に懸けて、史上初の空母対決に勝利を——と考えている様子だ。

# アメリカ海軍 レキシントン級航空母艦 サラトガ



全長	270.8m
最大幅	39.7m
基準排水量	36,000トン
主機	ターボ・エレクトリック 4基/4軸
出力	184,000馬力
速力	34.0ノット
兵装	20.3cm 55口径 連装砲 4基 8門 12.7cm 25口径 単装砲 12門
航空兵装	78機～90機
乗員数	2,122名
同型艦	レキシントン

1922年に就役したアメリカ海軍初の空母「ラングレー」は、給炭艦を改造したもので、速力や航続性能に難があった。このため、海軍内部では戦艦部隊に随伴できる性能をもつ本格的な空母として、タニエルズ・プランに基づいて建造が始まったレキシントン級巡洋戦艦の設計を流用した、3万9千トン級の大型空母の建造を計画した。しかし、ワシントン軍縮条約締結により、レキシントン級巡洋戦艦は陸艦が決定。この艦体をそのまま流用して、大型空母を建造することになった。

条約の排水量制限により基準排水量は3万6千トンとなったが、完成したレキシントン級空母は世界水準を大きくこえる性能を誇り、巡洋戦艦譲りの高速性能もあいつつ、アメリカ海軍の主力を担っている。

「問題は、敵空母の位置です。敵の位置が分からねば、攻撃のしようがありません」

「敵空母はウエーク島の南方、一〇〇哩<sup>カイリ</sup>以内の海域にいると考えます」

「サラトガ」艦長デビッド・C・ラムゼー大佐の質問提起に、ハンターが答えた。

「日本軍のウエーク島<sup>ウエーク</sup>攻略部隊は、マーシャル諸島のクエゼリン環礁<sup>かんしょう</sup>より出撃し、南からウエークに接近したと推測されます。敵空母の任務が上陸作戦の支援である以上、上陸部隊から大きく離れた位置に展開するとは考えられません」

「まず、偵察機<sup>ていさつ</sup>を出そう。日本艦隊がウエークの南方に在るといふのは、あくまで推測だ。敵の位置が分からぬまま、攻撃隊を出すわけにはゆかぬ」

「本艦<sup>V</sup>の偵察爆撃飛行隊<sup>B</sup>に、出撃を命じます」

フレッチャーの発言を受け、ラムゼーが艦内電話に歩み寄った。

飛行長ジョニー・ホワイティング中佐を呼び出し、

VSB3のドーントレスを発進させるよう命じた。

ラムゼーが受話器を置くと、フレッチャーは緊急信を受け取った時点から考えていたことを、幕僚たちに伝えた

「敵空母の搜索<sup>そうさく</sup>と並行<sup>へいこう</sup>して、ウエークの友軍を支援したい。敵の上陸部隊を空から叩けば、守備隊は大いに助かるはずだ」

TF14の現在位置は、ウエーク島よりの方位七五度、一五〇哩。

航空機なら、一時間ほどで到達できる。

F4Fやドーントレスの勇姿<sup>ゆうし</sup>は、島で頑張<sup>がんば</sup>っている守備隊の将兵を勇気づけるはずだ。

「そのお考えには、賛成できません。ウエーク支援に兵力を割<sup>き</sup>けば、肝心<sup>かんじん</sup>の敵空母を攻撃する際に、戦力が不足します」

「私も、参謀長と同意見です。本艦の搭載機は充分とは言えません。ただでさえ少ない艦上機を分散させれば、二兎<sup>にと</sup>を追う者になりかねません」

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はPDF形式で、作成されています。この続きは書店にてお求めの上、お楽しみください。